



主体的な学習行動・ 学習習慣の定着

『Guideline』では、さまざまな特集や連載を通じて、大学の教育の取り組みを紹介してきました。今年度は、「学生を成長させる大学教育」をテーマに連載します。

2014・15年度には『Guideline 特別号「ひらく 日本の大学」から見る大学の教育力』を発行。読者の先生方からは、「大学でも学生は成長する」という言葉が印象的だった。大学のみならず、就職後も成長することが求められている時代だと思う。高校生の進路選択にも考慮すべき通念だと思った」といった声をいただきました。

2016年度には、「大学が教育を充実させ、学生の学習に向かう姿勢や学習行動が変わってこそ学生は成長する」というテーマで、「大学教育と学生エンゲージメント」を連載。「学生エンゲージメント」という言葉には馴染みがないというご指摘も少なからずいただく一方で、その概念については「学習時間の増加や学習成果の向上に有効だと思った」等のご意見をいただきました。

そこで今年度は、それらのコーナーの取材や、「ひらく 日本の大学」調査、大学生の学習経験調査 JUES などを通じて見えてきた、学生の成長を促す教育の取り組みについて紹介します。なお、ここでは「成長」を、「専門分野の知識・技能」だけでなく、「汎用的技能」「自己認識」など、幅広く捉えています。

4・5月号のテーマは、「主体的な学習行動・学習習慣の定着」です。大学では、初年次教育を中心に、主体的に学習に向かう姿勢や行動を学生に身につけさせることを目的とした取り組みが行われています。それらが大学での学習成果や、社会に出てからの活躍にどのように結び付いていくのか、2大学の先生に紹介いただきました。

Contents

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
関内 隆 特任教授 芳賀 満 教授 …… p66
**全学共通で実施する基礎ゼミを基点に
「大学での学び」への転換を図る**

- ▶ 大学で不可欠な「能動的な学修」と「多様で批判的な視座の思考」を身につけさせる
- ▶ 課題設定、調査、議論、発表などの研究のプロセスを体験させる
- ▶ 基礎ゼミを通じて、主体的な学修姿勢や他の学生との協働性が育まれる
- ▶ 全ての教員が「基礎ゼミ」を担当。「基礎ゼミ」をきっかけに、専門科目の授業改善も進む

福岡女子大学 国際文理学部
和栗 百恵 准教授 …………… p69
**「目標設定」「活動」「振り返り」を重ねる中で
自分の生き方に向き合う「和栗プログラム」**

- ▶ 「事前学習」で「自分はどう生きたいのか」「それはなぜか」を徹底的に考えさせる
- ▶ 「教室と現場との往還」を重視し、座学で理論を学びながら現場での体験を繰り返す
- ▶ 「振り返りシート」などを通じて常に「なぜ」を問い続け、メタ認知の能力を伸ばす
- ▶ 受講者は社会の課題を「自分事」と捉えられるようになり、主体的に行動する習慣や、他者と粘り強くやりとりできる力が身につく

東北大学

全学共通で実施する基礎ゼミを起点に 「大学での学び」への転換を図る

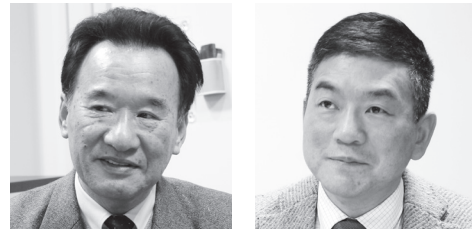
東北大学では、全学共通科目として、入学直後の学期に「基礎ゼミ」を実施している。アクティブ・ラーニング（以下、AL）を取り入れた少人数制の授業を通して、「受動的な知識・技能修得型」の学習から、大学で求められる「課題発見・解決型」の学びへの転換を図ることが目的だ。基礎ゼミによって、学生の学習に向かう姿勢や、学習行動にどのような変化が見られるのか。高度教養教育・学生支援機構の先生方へうかがった。

大学では「能動的な学修」と 「多様で批判的な視座の思考」が不可欠

東北大学は、2006年度に文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に「『学びの転換』を育む研究大学型少人数教育～基礎ゼミを基点とした『大学での学び』の構築～」というテーマで採択されたことをきっかけに、「学びの転換」をめざした初年次教育に取り組んできた。その狙いを、基礎ゼミ委員会・前委員長の関内隆特任教授は次のように語る。

「特色GPに申請した当時は、学びに対してあまり積極的でない学生がいることが課題となっていました。本学の学生は、学ぶ内容を教員が指示すれば頑張つて学ぼうとするのですが、何かに疑問を持ち、自分で問いを立てる力や、自ら学ぼうとする意欲が弱いと感じる教員が多かったのです。また当時は、大学設置基準の大綱化（1991年）以降に縮小した教養教育の再検討を進めている時期でもありました。そこで、大学で求められる学びへの『転換』をテーマとして、初年次教育科目を構築することとしました」（関内特任教授）

「大学での学びにおいては、知識・技能の修得に加えて、『能動的な学修』と『多様で批判的な視座の獲得』が不可欠になります<図表1>。なぜなら今、社会が大きな転換期を迎えているからです。世界は小型化、密集化、有限化しています。従来は『良設定問題（well-posed problem、解が一意に存在する問題）』を、坂の上の雲をめざしつつ皆で懸命に解けばよかった。脱亜入欧、殖産興業、富国



関内 隆 特任教授

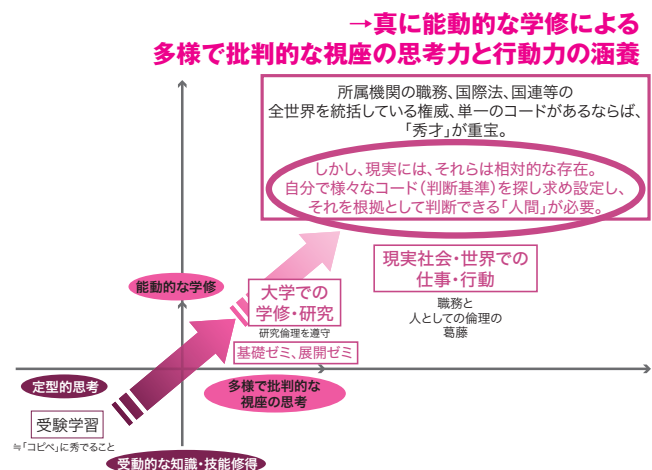
芳賀 満 教授

強兵、所得倍増計画、高度経済成長等であり、日本人はこのような思考方法と集団行動を得意とします。しかし現代そして未来の日本はそうではありません。今我々は『不良設定問題（ill-posed problem）』を解かないといけません。そこでは解くべき関数を自力で追加設定する必要があります。且つ解は複数個存在します。それを解く強い脳のマッスル、1つの『解』や『真理』にすぎらずに対象を相対化する力が必要なのです。1つの判断基準から導き出された1つの解や、真理にすぎることなく、多様な視座からアプローチし、自分なりの判断を下せる力が必要となります。そうした考え方を培ったり、学び方への転換を図るのが基礎ゼミなのです」（基礎ゼミ委員会委員長 芳賀満教授）

課題設定、調査、議論、発表など 研究のプロセスを体験する

2016年度の基礎ゼミは179講座と、例年、幅広いテーマで開講されている。これは、学部・大学院だけでなく、附置研究所や附属病院も含めた全教員が担当することとし

<図表1>基礎ゼミ・展開ゼミの意義



<図表2> 「東日本大震災から復興へ
—感じ、考え、議論する」授業内容

(1) 4月中旬～6月中旬の集中講義方式をとり、月曜日の3、4講時と土曜日の現場実習(一日コース)を予定している。
(2) 現場実習は、尚絅学院大学エクステンションセンターからの支援協力を得て実施する。
(3) 下記の日程は予定であり、変更の場合もある。
第1回 4/18 オリエンテーション
第2回 4/25 復興と心理：災害と向き合い、災害を伝える(1)
第3回 4/25 復興と心理：災害と向き合い、災害を伝える(2)
第4回 5/9 復興と言語文化：被災地にとって方言とは何か(1)
第5回 5/9 復興と言語文化：被災地にとって方言とは何か(2)
第6回 5/16 復興と歴史：過去から未来へ(1)
第7回 5/16 復興と歴史：過去から未来へ(2)
第8回 5/23 復興と社会倫理：「ポスト3.11学」に向けて(1)
第9回 5/23 復興と社会倫理：「ポスト3.11学」に向けて(2)
第10～12回 5/28 被災・復興地域の現場実習(名取市での一日実習)
第13回 6/6 実習報告内容グループワーク
第14回 6/13 現場実習報告会(1)
第15回 6/13 現場実習報告会(2)

(2016年度シラバスより抜粋)

ているためだ。

「本学では、基礎ゼミを、教育に対する教員の意識を転換する『実践型FD』として位置付けているため、全教員が担当することとしています。教員には、教え込もうとせず、学生が主体的、積極的に学ぶ工夫をしてほしいとお願いしています」(芳賀教授)

基礎ゼミは必修科目ではないが、各学部で履修を推奨しており、学生の評判も良いため、例年、99%以上の学生が履修している。

基礎ゼミのシラバスは入学前に配布され、受講希望調査が行われる。受講希望者が集中した場合には割り振りが実施されるため、第5希望まで記入することになっている。1クラス20名以下の少人数制で、いろいろな学部の学生による学部横断型クラスが編成される。

「入学予定者には、所属学部の専門性にこだわらず、興味のある分野を選択するように推奨しています。実際、あえて所属学部の専門とは異なる分野の基礎ゼミを選ぶ学生が少なくありません。そのため、ほとんどが文理融合のクラスになっており、中には10学部すべての学生が参加しているゼミもあります。他学部の学生と学ぶことで、多様なものの見方を知るきっかけにもなります」(関内特任教授)

授業は、講義形式ばかりにならないよう、「実験・実習型」「フィールドワーク型」「演習型」から、テーマや教員の専門分野に合わせて選択してもらうようにしている。

さらに、夏休み明け直前の9月末には「基礎ゼミ成果発表会」が行われる。基礎ゼミで行った研究について他のゼミの学生や教員に対して発表するものであり、優秀な発表をしたゼミは、来場した学生と教職員の投票により表彰される。成績評価には反映されないが、例年、約20の基

礎ゼミが、自主的に参加している。

「基礎ゼミの担当教員には、学生が自分でテーマ設定して、必要な情報を自分で調べ、ゼミ内で発表して教員や他の学生から意見をもらい、希望者は『基礎ゼミ成果発表会』で他のゼミや教員の前で発表するというように、研究者のやることを一通り経験させるよう、授業を組み立ててもらおうとしています」(芳賀教授)

現場実習を通じて課題を把握し グループで解決策を検討する

具体的にどのような授業が展開されているのか、事例を紹介しよう。

「東日本大震災から復興へ—感じ、考え、議論する」は、社会経済史が専門の関内特任教授のほか、災害科学、社会倫理、方言、メディア論などを専門とする6名の教員が担当するゼミである(2017年度は、工学系の教員も加わる予定)。大学院生のTA(ティーチング・アシスタント)もあり、20名の学生に対してきわめて手厚い指導体制となっている。

2016年度の授業は全15回<図表2>で、前半では各教員が専門分野の講義を行った。その後、被災地である宮城県名取市で実習を行った。そして、学生は「記憶の風化」「メディアの役割」「コミュニティの再構築」の3つのグループに分かれ、それぞれが復興をめざす上での課題を発見して解決策を考え、報告会で発表した。

「記憶の風化」をテーマとした学生たちは、「過去の津波到達点に碑が立っていたのに、誰も気が付かなかった」という地元住民の声を受けて、震災から得た教訓を風化させずにどのように残していくか、さまざまな観点から検討した。「メディアの役割」のグループは、ツイッターは震災直後に現場の情報が得られるメリットがある一方、デマが拡散するといったデメリットがあるなど、さまざまなメディアの有効性を検討した。「コミュニティの再構築」のグループは、復興住宅^(注)の整備が進む中、仮設住宅から移る住人と、仮設住宅に残る住人とに分かれることで、コミュニティをどのように築いていくのか、提言した。

「いずれも、簡単に正解が導き出せるようなテーマではありません。解も1つとは限らないでしょう。大学入学後の早い段階で、そうした複合的な課題に取り組むことはとても貴重だと思います。また、学生の所属学部は8学部と、非常に多岐にわたります。多様な学生が集うことによって、

(注) 復興住宅…災害で住宅を失い、自力での住宅再建が難しい住民のために自治体が設置する住宅のこと。

さまざまな考え方、アプローチの仕方があることを知り、視野が広がります。社会に出ると、きわめて複合的な課題に直面し、多様な専門家が協力して課題解決に当たることとなりますから、そうした将来の活動にも役立つ内容になっていると考えています。学生たちは、期待していた以上に現実的なプランを考え出しており、頼もしく感じています」(関内特任教授)

主体的な学習姿勢が身につく 研究倫理教育が今後の課題

学生の授業評価アンケートを見ると、基礎ゼミは他科目よりも高い評価になっている。特に「興味を持った」「意欲的に取り組んだ」「関連学習をした」などの項目が、全科目平均より大幅に高い。教員も、基礎ゼミの成果に手応えを感じている。

「基礎ゼミを通じて、主体的な学習姿勢が明らかに身についていると感じます。疑問に思ったことは自主的に図書館で調べるようになりますし、ゼミでの発言なども増えていきます。とりわけグループ学習の効果は大きいものがあります。本学の学生は個々で考えをまとめることは得意な一方、他の学生と協力することにはあまり慣れていません。グループで活動する中で、協働性が育まれていると感じます。基礎ゼミをきっかけに海外留学を意識する学生もいるなど、成長を感じます。

ただ、近年は入学時点の学生の様子に変化を感じています。以前は引っ込み思案の学生が多く、グループでディスカッションできるようになるまでに時間がかかっていたのですが、近年はあまり抵抗感がなくなっています。また、せっかく調査・研究したのなら、その結果をアウトプットするのが当たり前という意識を持っている学生が多く、発表にも積極的ですし、パワーポイント等の扱いも上手くなっています。これは、ALに取り組む高校が増え、その形式の学びに慣れていることが好影響を及ぼしているのではないかと感じています」(芳賀教授)

一方で、新たな課題も浮かび上がっている。近年はインターネットが普及し情報の検索が手軽になったため、いわゆるコピー＆ペーストが増え、論文等から引用するときに出典を明記するといったルールを守らない学生も増えていくのだ。

そこで東北大学では、入学者全員に『レポート作成のための手引き』を配布している。「レポートを書く上でやってはいけないこと」として、存在しないデータや研究結果

などを作成する「捏造」、研究過程で操作を行い、情報を正確でないものに加工する「改ざん」、他の研究者のアイデアや論文などを了解なしに流用する「剽窃」などを明記し、基礎ゼミでも紹介するようにしている。

さらに2017年度からは、2冊の『研究倫理の手引き』を配布し、研究倫理教育をより強化していく予定だ。

全学共通科目全体でもAL型の授業を導入し 「展開ゼミ」の設置も増加

基礎ゼミは、専門科目の授業改善にも役立てられている。「例年、11月には『基礎ゼミFD・ワークショップ』を開催し、優れた実践事例を紹介しています。それに刺激を受けて、専門科目でもALを導入する教員が増えていきます。講義形式の授業であっても、すぐに教えるのではなく、学生への発問を心がけ、考えさせる時間をとった上で答えさせるようにしている教員もいます。教員にとって、学生が考えている間、待つのは辛いことですが、基礎ゼミを通じてそういう意識を持つようになることで、専門科目の授業も変わっていくのです」(芳賀教授)

全学共通教育の変化を端的に表しているのが「展開ゼミ」だ。1年次後期から2年次後期に開講されるゼミで、基礎ゼミと同様にAL型の授業が行われている。

「展開ゼミは現在、約60講座開設されています。基礎ゼミへの学生の評価が高いことを受けて、ALの導入に積極的な教員が増えたため、展開ゼミの開講数も年々増加しています。多くの展開ゼミは、ALを取り入れて従来の全学共通科目を教えるものですが、基礎ゼミで学んだ内容をさらに深めたいという学生も多いため、基礎ゼミの内容を発展させたゼミの設置も増えています」(関内特任教授)

さらに芳賀教授は、専門教育を受けた後の学生に、基礎ゼミの手法を取り入れた教育を行うことも有効だと考えている。

「個人的な構想ですが、卒業間近に、学部合同で課題発見・解決型のゼミを実施できればと考えています。基礎ゼミが『入り口ゼミ』ならば、これは『出口ゼミ』です。専門科目を学んだことによって、深い考察力や、総合的な俯瞰力も高まっていますから、より高度な取り組みが期待できるでしょう」

東北大学では、学生が多様な視座で課題にアプローチする力を身につけ、社会で直面する複合的な課題に対応できるよう、今後も基礎ゼミを中心に、教育改善を進めていく予定だ。

福岡女子大学

「目標設定」「活動」「振り返り」を重ねる中で
自分の生き方に向き合う「和栗プログラム」

福岡女子大学は1923年、全国初の旧制女子専門学校である福岡県立女子専門学校として設立され、戦後、4年制公立大学となった。2011年度には、それまでの2学部5学科から、国際文理学部の1学部3学科へと改組し、「次代の女性リーダー育成」をミッションとして抜本的な教育改革を行っている。留学生と一緒に暮らす国際寮の設置、1年生は原則的に全寮制、学術英語プログラムやファーストイヤー・ゼミの導入などとともに、国内外での「体験学習」を充実させた。ここでは、新学部設置に向け体験学習プログラムを構想し、実践を重ねてきた和栗百恵准教授に、取り組みの特色をうかがった。



和栗 百恵 准教授

将来の目標を立てて終わり それに責任を果たす習慣がついてない

近年、高等教育において体験学習が注目されている背景には、企業や社会が求める資質・能力と、大学卒業までに学生が身につけているものが乖離していることがあると、和栗准教授は指摘する。

厚生労働省の雇用政策研究会第9回（2012年7月）資料を見ると、今後求められる人材像として、「未知の世界に積極的に飛び込んでいく前向きな気持ち、姿勢、行動力」「最後までやり抜くタフネスさ」「自分の頭で考え、課題を解決しようとする」といった能力や姿勢が並ぶ。一方で、同時期に株式会社情熱がまとめた「新人を燃やす技術」によると、昨今の新人には「自分本位」「他責傾向」「指示待ち」「元気がない」「すぐ折れる」の5つの特徴がある。

「自分本位」という傾向は、株式会社マイナビが例年実施している「大学生就職意識調査」にも表れており、年々「人のためになる仕事をしたい」「社会に貢献したい」よりも、「楽しく働きたい」「個人の生活と仕事を両立させたい」の比率が高くなるとともに、行きたくない会社として「仕事の内容が面白くない会社」「休日・休暇がとれない会社」「残業が多い会社」の比率が高くなっている。

また、経済産業省の調査によると、学生は将来のキャリアのために、ビジネスマナー、語学力、パソコンスキル、業

界の専門知識などが足りないと考える一方、粘り強さ、チームワーク力、主体性、コミュニケーション力などは十分に持っていると感じている。しかし、企業はそうした人間性に関わる部分や、それらを発揮するための態度や行動、そしてその背景にある人間観・世界観こそが学生に足りない部分だと感じている。

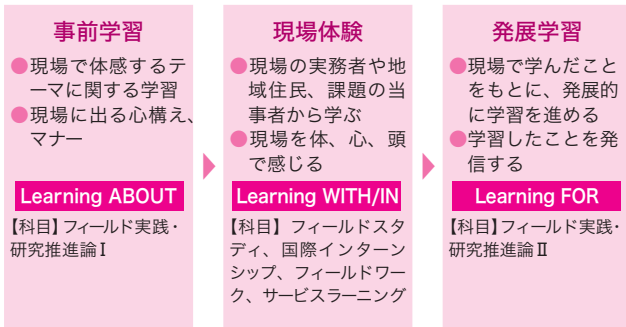
そうした中、体験学習に力を入れる大学が増えている。それは、社会と学生の意識のギャップを埋め、学生の社会的・職業的自立に向けた能力を養成することや、学生の目的意識を明確にして主体的な学びを促すことなどに高い効果が期待されるためである。

全学的な教育改革の一環として 国内外での体験学習を充実させる

福岡女子大学では2011年度の改組を機に、「実社会の課題や本学での学習内容に対するより深い理解を養う」「これからの社会で自らの生き方を切り拓くことができる実践的な能力を培う」ことを目的として、国内外での体験学習を充実させることとした。プログラムの設計の際には、さまざまな工夫をした。

「最近の学生は、与えられた課題をそつなくこなすことに慣れていて一方、学習を『自分事』として捉える意識が薄いように感じます。現場で何かを体験しても、それに自分がどう関わりたいか、自分の生き方はどう生かしていくかなど、自分に引き寄せて考えることができなくなっている印象があります。そうした状況の中で体験活動を導入しても、用意されたプログラムを体験してただ『楽しかった』と感じて終わるような、『消費型』の活動になってしまいます。それを防ぐためにも、教室での学習と現場体験を往還する中で、常に振り返りを行い、自分がどう在りたいか（意志）、何をやらなくてはならないか（役割）、そのためにど

＜図1＞「体験学習プログラム」の流れ



(福岡女子大学ホームページより作成)

のような力が必要か(能力)を考えさせるようなプログラムを構築しました」(和栗准教授)

福岡女子大学では2016年度、11の国内外現場体験プログラムが6人の教員によって展開されており、和栗准教授はそのうち、福岡市香椎地区、福岡市志賀島、スリランカでの3つのプログラムを担当している。いずれのプログラムも学年を問わず履修可能だが、1年次での履修を推奨している。

構成は担当教員により多少異なるが、和栗准教授が担当しているプログラム(通称『和栗プログラム』)は、前期の「事前学習」、年間を通じた「現場体験」、後期の「発展学習」(各2単位)を組み合わせた、通年のプログラムである<図1>。

「事前学習」で「自分はどう生きたいのか」「それはなぜか」を徹底的に考えさせる

和栗プログラムの具体的な流れを見ていこう。

前期の「事前学習」では、「自分はどう生きていきたいのか」「それはなぜなのか」を徹底的に考えさせる。そのため、開講時にまず、『エントリーシート』『目的目標設定シート』『基礎力シート』の3つのシートを記入させる。

『エントリーシート』には、和栗プログラムへの志望理由や、自分の強みや弱み、大学卒業後にどのような生き方をしたいかといった内容を記入する。「このプログラムに、どのように貢献していくか」という項目も設け、体験するだけで終わらないように意識づけもしている。

『目的目標設定シート』では、「自分の夢を実現するために、4年間でどんな学びを進めるか」「特に伸ばしたい能力、知識は何か」「その結果として、卒業時にどのようなパフォーマンスゴールをめざすのか」といった内容を具体的に記入する。さらに、毎週の大まかな学習計画(短期計画)を立て、最後に、1年後の自分をイメージして、自分へのメッセージを書く。

『基礎力シート』では、「福岡女子大学基礎力」^(注1)が、その時点でどの程度身についているか自己評価する。

3つのシートとも、目標や自己の現状に対する認識を書くだけでなく、「それはなぜか」を考えさせる項目が多い点特徴である。さらに、全ての受講生のシートに和栗准教授が目を通し、実現が難しかったり実現に向けた行動が伴わない場合などは、目標の見直しや改善の行動を促す。

「事前学習」では、香椎・志賀島・スリランカの3プログラムの学生が一緒に学ぶ。授業は全15回で、4月から6月前半までが学ぶことへの認識を醸成する「基礎体力づくり」、6月後半からが「体験学習」で行く地域への理解を深める「トピック・課題探究」の期間として位置づけられている。

『基礎体力づくり』の期間には、本学の目標とする人材像カリキュラムにおける体験学習の位置づけ、体験学習プログラムにおける事前学習の位置づけ、目標設定と振り返りの意味などについて考えさせます。近年の学生が『指示待ち』になりがちなのは、用意されたものを消費することに慣れており、学びにおいてもそれぞれの活動の位置づけや意味合いを考えていないし、教員も伝えていないことが原因の一つです。これらを授業の冒頭、そしてその後も継続して考えさせることで、プログラムに対する『土台』となる心構えを持たせることを狙っています(和栗准教授)

「トピック・課題探究」では、「国際開発」「まちづくり」など、プログラムごとに関連するトピックについて探究し、授業内でプレゼンテーションを繰り返す。そして、学期末レポートを執筆することで、学習した内容および自身の成長や改善点を俯瞰するとともに、夏休み以降の目標を立てていく。

座学と現場を往還する「現場体験」 学生がシラバスを作成する「発展学習」

和栗准教授が2016年度に担当した「現場体験」プログラムは3種類である。

「スリランカ Exploring “Development”プログラム」は、現地NGOの協力を得た村人との協働作業やホームステイ、縫製工場や酪農の現場での就労体験や、日本大使館や国際協力機構でのヒアリングを通じ、developmentを人間・社会の両面から探究する。

「香椎まちづくりサービスラーニング」では、大学の立地する福岡市香椎地区で、花火大会などの地域活性化イベ

(注1) 福岡女子大学基礎力…思考力、実践的課題解決力、実践的対人対応力、汎用的実践力、学問力の「5つの能力」と、それを構成する「13の力」からなる。各授業で重視する基礎力をシラバスに明示するとともに、ポートフォリオにおいて、学生がそれぞれの達成状況を自己評価できるようにしている。

ントに参画し、まちづくりの現場を知り、課題解決策を考える。

「志賀島水産振興サービスラーニング」は、福岡市漁協とベンチャー企業によるアサリ養殖事業の一端を担い、学生ならではの視点で「地方創生」の在り方を考える。

「花火大会事務局のミーティングに出席すれば、お金の問題、グッズ製作や警察との打ち合わせなど、多様な目配りが必要になります。アサリ養殖事業では、育てたアサリが大量に死んで、事業計画の見直しを迫られたこともありました。そうした現実の問題に直面することで、『自分は何ができるか』などを考えるきっかけとなり、学生の学びは加速します。また、現場には、自分のためだけでなく『地域のため』など、思いを持って活動している人がたくさんいます。そうした人々の生き様に触れることで、『他人事』を『自分事』と捉えられるようになる効果は大きいと考えています」(和栗准教授)

なお、渡航費やスケジュールの都合上、スリランカは夏休みの3週間に集中的に現場体験を行うが、香椎と志賀島のプログラムは年間を通じて実施する。座学で理論を学ぶ中で疑問が生じたら現場で確認し、現場で生じた課題を解決するためにまた教室に戻って学ぶというように、教室と現場との往還を重視している。

後期の「発展学習」では、学生たち自身で学習内容を決める。まず、「事前学習」や「現場体験」の中で見えてきた課題、疑問に基づいて、プログラム修了時点で何ができるようになることをめざすのか、目標を設定。どのような学習を通して達成するのか、計画を立てる。さらに、目標を達成できたかどうかを評価するため、先述の「福岡女子大学基礎力」なども参考にしながら、評価項目・基準も考えていく。

「振り返りシート」などを通じて常に「なぜ」を問いつける

「和栗プログラム」全体を通して重視されているのが振り返りである。

例えば、スリランカプログラムでは「現場体験」期間中の毎日、『今日1日の振り返りシート』に記入する。「今日の出来事を1つ挙げ、それに対して自分はどう反応したか」「昨日立てた目標に対して、今日何をしたか。目標を達成するためにどんな工夫をしたか。できなかったのなら、できるようになるために明日試せることは何か」「日本に帰国後、どんなフォローアップをするか」などの項目がある。

<図2> 「事前学習」の流れ

基礎体力づくり (4月、5月、6月前半)	トピック・課題探究 (6月後半、7月前半)	学びの俯瞰と 次のステップの計画 (7月後半)
枠組みの理解、 活動の「土台」となる 構えや手法を学ぶ	「development」、 「まちづくり」、「水産振興」、 「エシカル消費 (ethical consumption)」 情報の整理、自身の考え の形成	意味づけ、 意味づけをもとにした 次のアクションの 計画
読み物、レクチャー、 DVD	読み物、レクチャー、DVD プレゼン作成、リバイズ	総括プレゼン

(2016年度シラバスより作成)

それ以外の体験活動や授業でも、毎日ではないものの、報告書作成を通じて振り返りを促す。さらに、毎回の授業とともに活動についてのミーティングやメールのやりとりの中でも、和栗准教授からの問いかけによって、常に自分を批判的に振り返ることになる。

「私の役割は、学びの過程でしつこく『なぜ?』を問いつけることです。近年の学生は、目標設定においても、実現可能性が低い『夢』のような目標を立てたり、目標を立てても達成するための行動が伴わないことが少なくありません。『なぜそのような目標を立てたのか』『目標達成にはどのような行動をしたらいいのか』といった問いを投げかけることで、学生は目標として宣言したことは責任をもってやるという意識を持つようになります。

また、学生は、目的や理由もなく、無自覚に行動することがあります。『なぜそのように考えたか』『なぜそのような行動をしたのか』といった私からの問いに対して、もがきながら答え次の行動を考える中で、学生にはメタ認知^(注2)の力を高めてほしいと考えています。社会では、学生時代以上に自分で目標を設定して、それがどの程度達成できているか客観的に評価し、次の行動に移すことが求められます。変化の激しい時代において、自身の立ち位置をはっきりさせながら自分をマネジメントする習慣を身につけさせることは、とても大切なのです」(和栗准教授)

自分の生き方と向き合うことを求められ、学生にとって「キツイ」科目であるため、2016年度の「和栗プログラム」の受講者は3つのプログラムを合わせても6名と少ないが、受講者は大きく成長する。ゼミ長など学内でリーダー的役割を果たす学生が多いほか、卒業後は青年海外協力隊に参加、営業成績で表彰されるなど、「自分事」として捉えて活動する学生が目立つ。主体的に行動する習慣や、他者と粘り強くやりとりできる力が身につけているため、就職先でも高い評価を得ている卒業生が多いという。

プログラムを通じて、自分の意志、役割、能力を考え抜く経験を積むことが、大学で主体的に学ぶ態度や、社会で求められる資質・能力の育成にもつながっているのだ。

(注2) メタ認知…自分の認知(知覚、記憶、学習、言語、思考など)について、客観的に把握すること。